

2021年7月4日 礼拝説教要旨

詩編講解説教67「救いの道を知る」

詩編67：2～8、マルコ16：14～18

詩編第67編は分類上「感謝の歌」ということで神さまの恵みに感謝し讃える内容となっております。それがよく表されているのが4、6節ですが、ここは繰り返しのなっています。「神よ、すべての民があなたに感謝をささげますように。すべての民が、こぞってあなたに感謝をささげますように」（4、6節）この部分が感謝の歌と言われる所以であります。またその感謝は7節に「大地は作物を実らせました」とありますから、収穫の恵みを感謝するものと伝統的には捉えられております。ただ今日わたしたちがこの詩編を読む場合、それに限定する必要はありません。もっと普遍的に捉えてよいと思います。わたしたちにとっての収穫とは何でしょうか。実りとは何でしょうか。何か人生で成功することでしょうか。あるいは健康で豊かな生活ができて、順風満帆な人生であるということでしょうか。多くの人々はそういうことでなければ感謝はないと考えます。

またもう一步踏み込んで「当たり前で感謝」ということを言う人々もおります。今、普通に生活していることが実は当たり前ではないということに気づいて感謝する。よく病気をしたり、災害が起こるとそういう感覚を取り戻すことがあります。普通に生活していることが実は当たり前ではないのだと。しかし人間はだんだん欲が出てきて、当たり前で感謝することができなくなります。当たり前が当たり前になり、そこに尊さを発見できなくなる。そうすると人と比較して自分は何か足りないように感じたり、不平や不満ばかりが募ってきて感謝がなくなっていく。人間は改めて欲深い存在だと思えます。

しかし何れにしても、一般的には感謝というのは、わたしたち人間の側の状態や感じ方に根拠を置くことになっています。人生で成功することや、普通の生活への感謝もその人の感じ方、捉え方の問題であり、人それぞれなのです。ある人は感謝できるけれども、ある人は感謝できない。またその人の中でもその時々によって感謝できる時とできない時がある。しかし聖書が示す感謝というのは、根本的に違います。わたしたちの感じ方、気持ちの持ち用ではない。パウロの手紙で「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」（Iテサロニケ5：16～18）とあります。これはいついかなる時もということです。つまり人間の状態に左右されないのです。幸せな時だけ感謝できるようなものではなく、場合によっては、病気をしたり、挫折や失敗の只中でさえ、感謝することができる。そういう感謝があるのです。これは感謝の質が違うということでしょう。わたしたちはそういう感謝を信仰によっていただくのです。

「神がわたしたちを憐れみ、祝福し、御顔の輝きをわたしたちに向けてくださいますように」（2節）ここにこの感謝の源泉が表されています。「御顔の輝き」というのは、神さまの顔が喜んで、怒っているのではなく、機嫌が良いということです。神さまがそういう笑顔を向けてくださること。それが感謝なのです。教会学校の礼拝で歌うさんびかに「やさしいめが」というさんびかがあります。「やさしいめが、きよらかなめが、きょうもわたしをみていてくださる」そういう神さまのやさしい眼差しを感じるができる。そのようなやさしい眼差し、笑顔を向けるというのは、人間関係でもそうですが、関係が良好ということです。関係が悪ければ目つきは厳しくなり、顔を向けるどころか、そっぽを向いてしまうのです。

では、わたしたちは元々神さまからやさしい眼差しを向けられる、笑顔を向けられる存在だったのでしょうか。そうではありません。アダムとエバ以来わたしたちは神さまの怒りを買う存在になってしまった。創世記第3章の蛇の誘惑の話では、木の実を食べたアダムとエバは神さまの顔を避けて隠れたと記されています。わたしたちの方が神さまの顔を避けてしまう。「顔向けできない」と言いますが、まさしく人間は罪ゆえに神さまに顔向けできなくなった。神さまと面と向かうこと、神さまの眼差しが耐えられない存在になってしまったということです。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」(出エジプト33:20)とあります。神さまと顔と顔を合わせるような人格的な交わり、友好的な関係が破綻している。そこに人間の罪の状態があります。

この罪から人間は自分の力では抜け出せません。だからこそ、神さまはイエス・キリストを与えてくださいました。イエス・キリストによってこの顔向けできない状態からわたしたちを救ってくださったのです。それが十字架とよみがえりの御業に他なりません。十字架においてわたしたちの罪を贖ってくださり、よみがえりの命をもって、わたしたちを神の子として回復させてくださった。御前に生きる者としてくださいました。

その道はイエス・キリストを通して与えられました。3節の「あなたの道」というのは神さまがその御顔を向けてくださる道です。その道こそイエス・キリストです。「わたしは道である」(ヨハネ14:6)と言われたイエス・キリストを通して、わたしたちは神さまの御前に立つことができるのです。そこに神さまの憐れみ、豊かな恵みがあります。「神がわたしたちを憐れみ、祝福し、御顔の輝きをわたしたちに向けてくださいますように」(2節)この御言葉はイエス・キリストによって成就しました。だからパウロは言います。「そのときには、顔と顔を合わせて見ることになる」(Iコリント13:12)これは終末における希望を表しておりますが、しかし終末を待たずとも、わたしたちは今この恵みを先取りして味わうことができます。それが礼拝です。

礼拝の最後に祝福があります。アロンの祝福と言われるものですが、「主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」(民数記6:25~26節)神さまがこの週もわたしたちに御顔を向けてくださる。怒っておられるのではない。やさしい眼差しを注いでこの人生を見守ってくださる。イエス・キリストゆえにそういう確信を与えられる。それがわたしたちの生きる力なのです。そしてこの救いの道が与えられることこそ人生最大の収穫であり実りなのです。